

# Funai Overseas Scholarship

## 留学先決定に至るまでの経緯

2019年度奨学生 茂山丈太郎 / Hasso Plattner Institute, Germany

### はじめに

このレポートは私がドイツのHasso Plattner Institute(HPI)に入った経緯について述べるものです。ドイツの博士課程入学選考プロセスと米国大学院のそれとの違いも含めて述べますが、多くの船井奨学生と違い入る研究室を1つに絞ったため、特に米国でのPh.D選考プロセスについて本レポートが参考にならないかもしれないことを添えておきます。

私は2009年から山口県の徳山高専 機械電気工学科に在学し、主にメカトロニクスを学んでいました。ただ、もともと情報系か機械系かのどちらに進むか深く悩んでいたことに加え、高専在学中初期からモバイルコンピューティングやヒューマンインターフェースの研究をしたいと考えていたこともあり、大学では情報工学も併せて深く学びたいと考え、2014年に東京大学の機械情報工学科に編入しました。学部と大学院では希望の研究室に所属することができ、主にVRの触覚インタフェース研究をしていました。

### インターンシップ (2017年7月~9月)

HPIにJoinするきっかけとなったのは東大在学中に別の研究室の教授からの紹介で2017年の夏にインターンシップをしたことでした。ただ、インターンシップにも2通の推薦状が必要で、このときは前述の教授と研究室の講師の先生から推薦状を頂き、Skype面接を通して応募しました。しかし星の数ほどあるインターンのメールうちの一つとして読んでもらうことはなかなかなく、結局現地のPh.Dの人を通してようやく面接にこぎつけるということになりました。ポートフォリオWebサイトやCVの用意など、思い返してみるとやらないといけないことはたくさんありました。

Skype面接では主にどういうスキルがあって、どんなプロジェクトに取り組みたいかということを知りましたが、現地で具体的にどのようなことをしたいかがあまり固まっておらず、かなり悩んでいました。最終的には障害者向けの触覚インタフェースのプロジェクトに関わりましたが、結果自分のスキルセットに合致したプロジェクトだったこともあ

り、3ヶ月という短い期間で実装・実験を終えトップ会議に出すことができました（このインターンシップで軽くイタリア旅行に行くなどして楽しかった思い出しかなかったのも応募のきっかけでした）。

## インターンシップ後(2017年10月)

HPIの研究室のFabricationや触覚インタフェース、アクセシビリティといった課題にソフトウェア・ハードウェアの観点から解決するスタイルは、個人的にもやりたいことに近いこと、研究室としてトップ会議に常に通し続けるという強いモチベーションがあったこともそうですが、高専時代からヨーロッパ留学に憧れていたということ(実は高専の卒業研究の指導教員もドイツ人数学者でした)も重なり、ドイツで博士課程に進む大きな要因となりました。幸いインターンシップで進めたプロジェクトが会議にアクセプトされるなど現地で高い評価を得ることが出来たため、なんとすぐにオファーを頂き、この時点で入学許可が降りることとなりました。

この時、学年は修士1年でしたので、来年度に東大の教授から海外Ph.D留学生向けの奨学金に応募するように勧められたことが、船井財団への応募のきっかけでした(その他の財団は受けませんでした)。

インターンを通してオファーを頂いたことと、志望研究室を一つに絞ることができたこと、志望の段階で大学院に落ちるというリスクが無かったことが、SoPや推薦書などの書類審査、TOEFL / GREなどの語学試験の結果を提出する等を通してapplyする米国大学院留学との違いだと思いました。特にHPIの研究室はインターンでの能力やプレゼン(Talk)・面接を通して選考しているということもありそうです。語学試験の成績を報告する必要が無いことが驚きでした。分野ではトップクラスの研究室であることで有名だったことも作用しましたが、船井財団の同期の話を知っていると今になってみれば米国大学院留学という選択肢もあったのかなと思います。ただ、実際に一緒にプロジェクトを進めて、研究室と自分自身互いの相性を確認するというのは極めて大事な気がします。ただ何度もインターンシップをするわけには行かないので、やはり運の要素もあるのかと思います。

いずれにせよ、ずっと憧れていたヨーロッパ留学を果たせたというのは個人的には良かったと考えています。

## ドイツでの生活

現在はベルリン中心部のTiergartenという静かな場所に住んでおり、ポツダムの方にあるHPIまでは電車で20分ほどかけて通っています。首都にしては人口は東京と比べてかなり少ないですが、歴史的な背景もあって国際色が濃く、常に様々な国から来た人で異文化交流を通して賑わっている都市だと感じます。しかしながら移民問題などを端緒とする人口流入が進んでおり、ベルリンの住宅事情は極めて深刻で、住宅占有率は非常に高く、家賃や立地も含めて条件の良い家を探すのは難しい現状があります。友人も頻繁に引越しをしており、最初の家を見つけるのはなかなか大変でした。

それ以外の要素で苦勞することはあまりなく、日本食も割と揃っていて気候も快適です。中央ヨーロッパの安定した気候に恵まれて自然災害も一般に少ないです(が、なんと今年の夏は中央ヨーロッパを観測史上最強の熱波が襲ってしまいました)。

ビザについては、予め学生ビザに必要な書類を集めれば、早朝に外国人局(Auslendaersbehoerde)にて簡単な面接後約5分で無料で発給されるというスピード感でした(ここも米国との大きな差異かと思えます)。日本人学生だったということは有利に働いたと思いますが、住民登録やその他の手続きも諸々、合理化されていました。また第2外国語としてのドイツ語は英語がある程度できていれば割とすんなり学べます。Ph.D取得までドイツ語がペラペラになるように頑張ります。

## さいごに

大学院留学、特にPh.D課程というものは、自分自身に向き合い、自分が一体何者となるのかを決めることも含め、最も自分に時間を費やせる最後の、そして最高の時間だということを、理事の先生が壮行会で仰っていました。そのような時間に集中できるのは、船井情報科学振興財団のご支援があってこそだと感じています。ご支援に心よりお礼申し上げます。まだ研究者としては未熟者ですが、これから学位取得まで精一杯精進し、ご期待に応えられるよう努力いたします。そして、研究を精一杯楽しむことができます。

2019年6月吉日 茂山丈太郎